

〈書評〉

浜野道博 著

検証 キルギス政変 天山小国の挑戦

東洋書店, 2011年

大倉 忠人

皆さんはキルギスという国名を聞くと何を思い起こされるでしょうか。1999年に国際協力事業団（現在のJICA）の日本人専門家（鉱山技師）がイスラム過激派により数ヶ月に渡って南部の山岳地帯で拉致された誘拐事件でしょうか。それとも2005年に現職のアカエフ大統領が蜂起した民衆によって国を追われたチューリップ革命、そして2010年に同じくバキエフ大統領がその座を追われた四月政変、または同年南部の都市オシュにおけるキルギス民族とウズベク住民との大規模な民族衝突でしょうか。最近では、2013年にキルギスにおける一種の「慣習」として日本人カメラマンによって世界的に脚光を浴びた「誘拐婚」の実態でしょうか。まさに、「不安定の弧」の一角を担う国として、キルギスという国は日本人に常に暗いニュースを提供してきたと言えよう。

こうした暗いイメージとは裏腹に、夏の晴れた日に中央アジアの真珠と呼ばれるキルギスの湖・イシクタルの北岸から対岸を臨むと万年雪をたたえた天山山脈が圧倒的な威容で眼前に迫ってくる。ここイシクタルはソビエト時代からソビエト共産党幹部の別荘や宇宙飛行士も利用したサナトリウム（保養所）が数多く建てられた風光明媚な保養地である。現在でも隣国のカザフスタンなどから多くの観光客が避暑に訪れるキルギス随一の観光地である。また、草原地帯では、元来遊牧民族であるキルギス人が羊や山羊などを放牧し、のんびりと暮らしている姿を目にすることが多い。この国が中央アジアのスイスと呼ばれる所以の一つでもある。しかし、ユーラシア大陸の中心部に位置し、内陸性気候に属するキルギスの夏は短く、八月頃末までに農作物の収穫

を終えると、短い秋の後に長く厳しい冬がやってくる。

1991年にソビエト連邦から独立したキルギスが今日に至るまでの約20年間に、社会主義から民主主義へ、計画経済から市場経済へと大きく政策の舵を切った結果、多くの国民が長く厳しい「改革の冬」に晒されることになった。とくに、1990年代は、キルギスの社会システムや法制度がめまぐるしく変わる中で、物価が乱高下し、多くの国民は社会環境の変化を受容し、耐えしのがなければならぬ厳しい時期であった。そして、2000年代に入り、ようやく国民の生活に安定の兆しが見え始めた頃に、今度は2010年に至る10年間に政治の基盤が大きく揺らぎ、上述した二度の革命が起こるなど、キルギス社会に大きな動揺をもたらされたのである。これらの革命は春を迎えるための春嵐であったと言えよう。本書は、この二度目の春嵐である「四月政変」勃発の端緒と文脈の検証を軸として、キルギス社会の深層に迫るものである。

まず、表題を一見すると、政変の事実を立証するための堅苦しい論理構成を想像させるが、本書では情緒あふれる筆致により、政変勃発の経緯を的確に伝えた後、政変のキーマンである歴代の大統領のアカエフやバキエフ、また暫定大統領として大きく民主化を推進したオトゥンバエバ、そして本書が発行された直後に大統領に就任したアタムバエフなどの経歴や人物評などを巧みに織り交ぜながら、この政変の背景にある人間模様を色鮮やかにあぶり出している。例えば、オトゥンバエバ前大統領がどのような人物なのか、幼少時代から遡って描かれている点

などは実に興味深い。つまり、本書は無味乾燥な事実の検証に留まらず、血の通った一冊となっているのである。

また、世界で唯一アメリカとロシアの軍事基地が存在する国としてキルギスが特徴づけられているように、中東情勢を左右するアフガニスタンへの足がかりとして、また将来経済成長が見込まれる中央アジアでの覇権を握るための要衝として、キルギスにおいてロシアとアメリカがどのような駆け引きを行ないながら、支援と介入を行ってきたのかについて、世界情勢を踏まえながら検証されている点においても読み応えがある。例えば、アザトゥックというラジオ局やアメリカを代表するボランティア団体であるピースコープ（日本の青年海外協力隊に相当）がキルギス全土での活動を通じて草の根レベルでキルギスの民主化や親米促進の役割を担ってきたことなど、気付かないところで様々な大国の干渉や駆け引きが行われていることを知ることができる。

さらに、政変直後に現地のインターネットメディアであるアキプレス社が行なった政変の闘士として名を馳せたアリヤスベク・アリムクーロフに対するインタビューの翻訳を補章として掲載している点においても、日本のメディアからは決して得ることのできない革命の立役者の勇姿を垣間見ることができる。このように、本書が目的とする政変勃発の事実と文脈の検証を質感とともに伝えるための工夫が随所に施されており、本書を特徴づけている。

本書全体を通じて、著者の長年の旧ソビエト連邦やロシアとのビジネス経験や個人的なロシア社会との深い関わりの中で培われた経験に基づいて、キルギス人複雑なメンタリティーを読み解いている。また、キルギス日本センター所長としての人的ネットワークから得られた現地の生の情報と堪能なロシア語を駆使して収集されたキルギスのみならずロシアにおけるメディアからの情報をバランスよくかつ適切に織り交ぜながらキルギスで起こった真実に迫っており、浜野道博氏にしか描けないキルギス史観が展開されているのである。

最後に、本書の存在意義を考えると、まずはソビエト連邦から独立してからのキルギスがどのような

経緯を経て現在に至っているのか過去の事実を知る上で参考になる。また、キルギスがどのような国であり、キルギス民族がどのようなメンタリティーを持っているのかを知る上でも有効であると言えよう。つまり、キルギスについて知りたい人、これからキルギスと何らかの関わりを持つ人にとっては必読書であると言えよう。また、研究者にとっても、将来の歴史家がキルギスで起きた二度の政変を再考する際に複眼的かつ客観的な視座を与えてくれるものである。しかし、残念ながら、本書の随所で示される情報には原典が十分に明示されていないため、本書の内容をそのまま引用する際には注意が必要である。しかし、この点を差し引いても、本書は幅広い観点から政変を捉え、キルギスの真実に迫っている点において読み応えのある価値ある一冊であると言えよう。